The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	嗚呼財津先生
Author(s)	太田, 勘兵衛
Citation	懐徳. 1932, 10, p. 61-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88867
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

仲田應弘

昭和六年四月廿六日　佐々木恆清先生の御伴して大和萬葉遺蹟見學

いかづちの宮のあとぞと指すところ藪原の中に櫻花咲く

十一月廿五日　大軌電車にて佐々木恆清先生の奇禍に遭はれしをきゝて

國史の興味出て來りしを喜びしが佐々木先生急死し給へり

嗚呼財津先生

太田勘兵衛

昭和六年の十月三日、今日は懷德堂恒祭で堂友達はそれ〳〵お役を受持て世話をさせて頂くので自分も受附が常役であるので、午後零時半頃事務所の二階へ昇つて見ると大變じや、先生が大ぶんお惡くて腎臟らしい、市民病院へ入院なされたかも知れぬと。

狩野先生がお見舞に今からお出なさる、誰かお供をと云ふので、私が住吉町のお宅まで御案内役、モウ市民病院へ御入院でしたと、薛さんの奥さんから承り廻れ右をする。

市民病院で狩野先生は、財津先生が狩野が直接見舞に來たといふ事を病人が知つて、病氣にさはる樣

な事があつてはならぬから、家人をよんでソット申傳へて吳れとのお心盡しも今は涙の種で、醫長さんは狩野先生が直接お見舞になつても、もはや意識不明であるとのかなしき場面に直面した。

四日午前十時廿二分御逝去のときもお枕元にて訣別に立禮させて頂きましたのも何にかの御緣だつたのでせう突然の事でボーとしました。

顧れば懷德堂敎授先生は、昭和二年四月故松山先生御逝去後二ヶ年ほど定まりませなんだ處、財津先生が狩野先生の御懇望と、師弟の御情義を重んぜられ本堂の爲我等の爲めに御就任下されまして、明かるい懷德堂と成り、若い學生達が聽講にお見にになつて、大阪文化の上に意義有る懷德堂施設の眞價を發揮するのも近い事であると、心私かに悅んで居つたのであります。

創立當時西村碩園先生の御訓示にも、本堂の眞價値は聽講生君達の負擔で有る折角勉强して下さいとのお言葉で有つた、財津先生が就任せられ篤學の若い學生達が立身出世せられて、西村先生の御遺訓が實現する事と思つて居つたが、又一時的たりとも望薄くなりました。

なつかしみある慈父と申しますのは此財津先生です、謹嚴硬直な篤學者の形容かは存じませんが、私輩の如き大阪土着の町人は高位の方でも大官でも、將た大學者にでも、心易く慣れますとすぐお友達にでも交際する樣に思ひまして、兎角欠禮を仕出來かしますが、先生は其の處を御受入下されまして親しみよく御敎導を蒙りましたお講義でも無學ものゝ私等にドウデスあの位でお判りになりましたかと

お話しかけでした。議論好きな聽講生が時折賢問か愚論かわからぬ事の反問が出ましても、先生は諧謔偶發で、しかも急所をそらされまして慢心者を得心させられました人格の所有者でした。

昭和四年六月の事かと存じます、會議室で先生なんでこんな所へ御就任なつたのです先生はまだ〳〵大高其他の學校で御勉强下さる方が、結構でしたのに、最も本堂の爲めには此れ程有難い事はないのですが先生御本人のお爲ではないではありませんか。

アハー　君のお眼からソーカかも知れませんがこれで結構です研究も致したいですが君達も居られてなー。

こゝであります君達も居られてなーと、此お言葉が各方面に好感を產み出しますのです。

由來本堂の事業は舊幕德川時代の漢文學講習所の重建とて、大阪市民中には唐人の寢言位しか思ふて居らぬ方々もある次第ですから、現代離れのしてある處でない時代に即した修身齊家の尤も現代に必要なる精神食堂であると曰ふ事を一般市民の腦裏に植附けんとする時この適任者たる、この無礙なる葆光院德譽愛象居士先生を懷德堂から、否此世界から失ひました事は、惜しみ悼みましても、盡せぬ事であります。嗚呼財津先生。